景観まちづくり学習助成事業実施校　　学校名　　横須賀市立鶴久保小学校

① 学習指導案

プログラム	No.4　「　まちの色・いろいろ　」
単元名 （全70時間）	めざせ！つるくぼアーティスト
学習のねらい	・地域の「色」に関わる探究的な学習の過程において、課題解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特長について理解する。 ・地域の「色」から問いを見いだし、その解決に向けて仮説を立てたり調査して得た情報を基に考えたりする力を身に付けるとともに、考えたことを、根拠を明らかにしてまとめ・表現する。 ・地域の「色」についての探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、自ら社会に参画しようとする。
学習内容	1　地域にどのような「色」があるのかを知る 2　地域の「色」の魅力やよさを体感する 3　地域の「色」を生かして“自分”表現する 4　表現活動をふり返る
参考資料 準備品 実施場所等	タウンニュース　地域の広報誌　　等 児童用デジタルカメラ　表現活動で使用する画材・材料　　等 横須賀市文化会館　不入斗公園　上町商店街　猿島　三笠公園　　等

学習の流れ

時間	学習活動	教師の指導	評価
5	地域にどのような「色」があるのかを知る インタビュー調査	図工の学習における「色」についての見方・考え方を活用する。 視点を「校内」から「まち」へと広げていく。	探究的な学習に主体的・協働的に取り組んでいる。
30	地域の「色」の魅力やよさを体感する 実地調査	収集した情報をもとに、まちの景観に直接触れることができるようにする。	調査して得た情報を基に考えている。
30	地域の「色」自覚し、それらを生かす 表現活動	相手意識と目的意識を明確化する。	感じたことや考えたことについて、根拠を明らかにしてまとめ・表現する。
5	表現活動をふり返る	4月と3月で比較することができるような成果物を積み重ねていく。	互いのよさを生かしながら、自ら社会に参画しようとしている。

＜留意点＞
・子どもたちの実態に応じて、柔軟に他者や一般社会と関わっていく
・子どもたちの能動性に合わせて学習の流れを変更していく

② 事業実施報告書詳細

学校名　横須賀市立鶴久保小学校

時間数	場所	概要	活動記録（写真）	対象者の反応
2	教室	探究的な学習の流れ （1年間の見通し）		
		図工×総合 「色」に興味を持ち、自分の個性に向き合う		
3	学校内	アート活動① 教室の中で１２色の色見本をつくろう		・同じ「赤」でも隣り合う色によって感じ方が違う ・一つの色と複数の色では見え方が違う
5 （行事）	衣笠山公園	実地調査① 学校外にどのような色があるのか知ろう		・季節によって色がちがう ・人工物の方がいろいろな色がある ・自然は茶色か緑が多い
１５	学校敷地内 教室	アート活動② いろいろな色の写真を集めて（撮って）モザイクアートをつくろう		・学校敷地内は茶色や緑色が多い。 ・もっと多くの色を集めるためには

				校外に行く必要がある。
１０	地域 （学区内）	実地調査② 地域（学区内）には、どのような色があるのか知ろう		・お店や看板は他と違う色、とくに目立つように色がつかわれている。 ・色には意味がある（信号や標識）
５	横須賀市 文化会館	実地調査③ 色が生み出す世界を味わおう		・人によって（時や場も含む）心地よいと感じる色が違う。
５	三笠桟橋 猿島　等	実地調査④ 自分の町を遠くから見てみよう		・アップの視点とルーズの視点では同じ町でも見え方が違う。 ・視点を変えることによって多様な見え方がある。 ・自分たちの町の色は緑（自然）がたくさん残っている。
１０	学区内	実地調査⑤ 地域の方に好きな色合いを聞いてみよう		・回答者の年齢層によって、心地よいと感じる色合いが違う。
１５	教室 文化会館	アート活動③ 町に色をつくりだそう		・反対色、膨脹色、暖色・寒色等の組み合わせが町の雰囲気をつくっている。 ・色は人を楽しませることができる。

③　実施内容について

（1）実施にあたり工夫した点 総合的な学習の時間に限らず、各教科横断的に資質・能力を育みながら取り組んでいった。 ・図　工：色彩への感性を働かせる/つくりだす喜びを味わう ・算　数：必要なデータを処理する ・国　語：言語を介して他者と関わりながら必要な情報を収集する ・家庭科：実生活をふり返る　　等 また、学年２クラスで取り組んだが、学習の最終到達地点は同じとしながら各々の観点から学習課題を探究していったため、幅広い学びの機会があった。
（2）実施にあたり苦労した点 気づきや学びを表現する際、多様な手段があるため、子どもたち一人ひとりが自分事として取り組むことができる場を用意することが本単元の最重要手立てであった。学びを自分事として「やってみたい」となっている子どもたちを、さらにその先の学びへと導いていくためには、即興的な対応が必要であった。
（3）児童の反応 普段、何気なく通り過ぎてしまう景色にじっくりと向き合うことで、あらためて自分たちの町を自覚化することができていた。その中で、「色」に対する関心も深まり、本単元における「町の色」だけではなく、図工の平面作品や国語の詩の挿絵、書写の作品等に対して「自分にしかできない色表現をしたい」という意識が生まれていた。
（4）担当教諭及び担当外教諭の変化 「町の色」を通してあらためて「色」がもつ力を自覚することができた。とくに本校の地域では「緑」が多いため、どこか柔らかい雰囲気を感じ取ることができ、ゆっくりとした時間が流れるような場所に居心地の良さを感じている。その「町の色」は、一つ一つ小さな「色」が重なり合ってできているということをあらためて自覚することができた。
（5）今後の課題と取り組み〔児童の思考過程と指導内容との関連付けから、留意すべき事項等〕 １年間を通した単元デザインにより、複数回の探究サイクルが回っていった。最終的な目的は自分が「この町、好きだな」「こんな色があるから、この町はこんな雰囲気だな」と気づくできるようになることであったが、そうした活動を通して何ができるようになったのか、何を学ぶことができたのかを子ども達自身が自覚することが大切だと考えている。こうした学びは１年間で完結するものではなく、次年度は探究課題は異なるものの、探究的な学びを積み重ねていく必要がある。